

# 平成29年度 戸田市教育研究集録

## 教育フェスティバル 開催

平成30年1月9日(火)、戸田市文化会館にて「戸田市教育フェスティバル」が開催されました。今年度は、各分野で日本を代表する、筑波大学 人間系 障害科学域 知的・発達・行動障害学分野 教授 柘植 雅義 氏と、文部科学省 初等中等教育局 教育課程課長 淵上 孝 氏を講師にお招きし、御講演いただきました。

### 講演1 特別支援教育のこれから～インクルーシブな教育と社会に向けて～



筑波大学 人間系 障害科学域  
知的・発達・行動障害学分野教授

柘植 雅義 氏

#### ・根源的な問いについて考え続けることの大切さ

これからの特別支援教育を考えるにあたり、「特別支援教育とは何か、障害とは何か、障害による差別のない社会をどのようにつくっていくのか」といった根源的な問いについて考え続けることが大切であるとの指摘がありました。

#### ・キーワードは「社会的障壁」と「合理的配慮」

発達障害者支援法の10年ぶりの改正(平成28年5月)で定義が大きく変わったことに触れ、新たに追加された内容である「社会的障壁」について、第二条3をもとに、説明されました。また、「合理的配慮」については、障害者権利条約第二条の定義を挙げられ、学校教育における教育内容・方法、支援体制や

施設・設備についての合理的配慮を詳細に説明していただきました。

いくつかのエピソードを挙げ、「社会的障壁」の除去と「合理的配慮」の適切な提供を進めていくこと、インクルーシブな教育や社会の実現には、障害のある子供の教育のみならず、周りの子供や大人の教育が必要であるとの指摘がありました。

また、「上手く学べない」、「上手く行動できない」というのは、子供の責任ではなく、周りの大人の対応の仕方を変えることが大事であり、根拠(エビデンス)に基づき、子供一人一人の深い理解と適切な指導・支援が大事であると述べられました。

#### ・特別支援教育のこれから

「障害のある子の周りの環境を整えることがとても重要」であり、さらに、「障害のない子への特別支援教育、全ての子への特別支援教育が重要」という視点を持ち、特別支援教育は「これからどこに向かうのか?ではなく、どこに向かうとよいか?」と問い続け、自ら考え、行動を起こして欲しいと力説されました。

### 講演2 新しい学習指導要領の考え方-中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ-



文部科学省 初等中等教育局  
教育課程課長

淵上 孝 氏

#### ・今回の改訂と社会の構造的変化

##### —社会に開かれた教育課程の実現—

近年、各種の学力調査において、日本の小・中学生は上位を維持しており、また、算数・数学、理科に対する意識も国際平均との差が縮まっている傾向が見られるとのことでした。

子供たちが社会で活躍する頃には、社会や職業が大きく変化する可能性があり、自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力が必要となる。そのためには、教育の在り方も進化させなければならぬと述べられました。「何を教えるか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であると指摘されました。

#### ・どのように学ぶか—主体的・対話的で深い学び

##### (アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善) —

「アクティブ・ラーニング」の視点においては、「深い学び」の視点が極めて重要であり、学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」であると指摘されました。各教科等の特質に応じた「見方・考え方」とは、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という物事を考える「視点や考え方」のことであり、これらは、大人になって生活していくにあたって重要な働きをするものであると説明されました。「見方・考え方」には教科等ごとの特質があり、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものとして、教科等の教育と社会をつなぐものであると述べられました。

#### ・カリキュラム・マネジメント

##### —教育課程を軸とした学校教育の改善・充実—

現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実する必要があり、そのため、学校全体として、教育内容や時間の適切な配分、必要な人的・物的体制の確保、実施状況に基づく改善などを通して、カリキュラム・マネジメントを確立することが重要であると力説されました。

## 戸田市教育委員会



▼戸田市教育委員会公式 Facebook  
<https://www.facebook.com/todaedu>